

盲腸

橫光利一



Fは口から血を吐いた。Mは盲腸炎で腹を切つた。Hは鼻毛を抜いた痕から丹毒に浸入された。此の三つの報告を、彼は同時に耳に入れると、痔が突発して血を流した。彼は三つの不幸の輪の中で血を流しながら頭を上げると、さてどつちへ行かうかとうろろうした。

「やられた。しかし、」とFから第二の報告が舞ひ込んだ。

「顔が二倍になつた。」とHから。

「もう駄目だ。」とMから来た。

——俺は下から——と彼は云つた。

彼はもうどつちへも行くまいと決心した。死ぬ者を見るより見ない方が記憶に良い。彼は三点の黒い不幸の真中まんなかを、円タクに乗つて、ひとり明るい中心を狙ふやうにぐるぐると廻り出した。血は振り廻されるやうに流れて来た。

——俺は下から、

——俺は下から、

下から不幸が流れ出す故に、頭の上の明るい幸福を追つ馳けるのだ——だが、廻れば廻るほど、彼に付着して来たものは借金だった。——幸福とは何物だ？——推進機から血を流して借金を追ひ廻す——その結果が一層不幸であると分つてゐても、明るい空を追つかけ廻したそのことだけでも幸福だ。——それが喜ばしい生活なら、下から不幸が流れ出してふまで、幸福な頭の方へ馳け廻らう。——死ねば不幸はなくなるだらう。——死なねば、幸はなくなるまい。——四人の中で死んだ者が幸福だ。——誰がその富籤とみくじを引き当てるか。——彼は競争する選手のように、円タクに乗つて飛んでゐた。

と、Mが死んだ。

彼は廻り続けた円タクの最後の線をひつ張つてMの病室へ飛び込んだ。が、Mの病室は空虚からだった。医者が出来て来て彼に云つた。

「今日、退院なさいました。」

「どこへ行つたのです？」

「さア、それは分りません。」

——それや、さうだ。

——だが身体の中で何の必要もない盲腸で殺やられると云ふこととは？

——身体の中に、誰でも一つ、幸福を抱いてゐると云ふことになつて来る。

彼は円タクに乗つて、盲腸のやうな身体をホテルに着けた。ホテルのボーイは彼に云つた。

「もう部屋は一つもございません。」

その次のホテルも彼に云つた。

「もう部屋は一つもございません。」

——死を幸福だと思ふものに、ホテルは部屋を借す必要は少しもない。

彼はまたぶらりと円タクの中へ飛び込んだ。

「どこへ参りませう。」と運転手は彼に訊いた。

「どこへでもやつてくれ。」

円タクは走り出した。彼は運転手の後から声をかけた。

「明るい街を通つてくれ、明るい街を。暗い街を通つたら金は出さぬぞ。」

——盲腸が円タクの中で叫んでゐる。

彼はにやりと笑ひ出した。

——此の盲腸は、今度は誰を殺すのだらう。

——だが、身体の中に、誰でも一つの盲腸を持つてみると云ふことは？

彼は街路を、血管の中の虫のやうに馳け廻つた。だが、此の盲腸はどこへ行くと云ふのだらう。



底本：「定本横光利一全集 第二巻」河出書房新社

1981（昭和 56）年 8 月 31 日初版発行

底本の親本：「文藝時代」

1927（昭和 2）年 4 月 1 日発行、第 4 巻第 4 号

初出：「文藝時代」

1927（昭和 2）年 4 月 1 日発行、第 4 巻第 4 号

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、旧字、旧仮名の底本の表記を、新字旧仮名にあらためました。

入力：高寺康仁

校正：松永正敏

2001 年 12 月 11 日公開

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。